

刀剣の歴史と思想

第17回

酒井 利信

『太平記』が語る草薙剣像

三種の神器は、武家にとつて、戦乱のつづく社会の中で自らの立場を決定づける、非常に重要なものであつた。

源平争乱の最中、両軍ともにこれを実際に所有することに執念とも思われるほどこのだわりをみせ、結果、平家の滅亡とともに宝剣である草薙剣のみが紛失する。このことが逆にこの宝剣に対する注目度を増すこととなつた。

この後、草薙剣像は、独自の展開をみせる。日本刀剣思想を方向づけることになる、興味深く、また重要なポイントでもある。

このことが『太平記』に如実に語られている。

▼草薙剣返還説話

小島法師などがあげられるが、詳細については不明である。

今回のメイン・テーマは、『太平記』に語られる草薙剣のイメージについてである。

『太平記』の中に、草薙剣について、當時どういった捉え方がされていたかを如実に語る部分がある。「伊勢より宝剣を奉る事」⁽¹⁾の一節である。非常に面白い件であり、思想的に重要な深みをもつてている。

今回はこの部分の描写を追つてみたい。

『太平記』は、鎌倉幕府滅亡と南北朝の争乱を描いた四十巻からなる長編の軍記物語で、南北朝期に書き継がれ、室町初期には成立したといわれている。作者については

そもそもこの話は、むかし安徳天皇とともに壇ノ浦の海底に沈んだ宝剣が出てきた



刀剣の歴史と思想

『太平記』が語る草薙剣像

という騒動である。

伊勢の国に円成という山法師がいて、大神宮への千日参詣の志をたて、毎日海水で身を清めて一晩おきに参詣していた。ちょうど千日目の満願の日に身を清めようと磯へ行き沖を見ると光る物がある。この光物、次第に磯へ寄ってきたので取り上げてみると、二尺五、六寸の三鉢の柄のついた剣のような形のものであった。円成はこれを持つて大神宮へ参る。

そこにいた十二、三歳の童が急に物狂いになつて、次のように言つた。

「神代ヨリ伝テ我国ニ三種ノ神器アリ。継ヒ繼体ノ天子、位ヲ繼セ給フトイヘ共、此ニノ宝ナキ時ハ、君モ君タラズ、世モ世タラズ。汝等是ヲ見ズヤ、承久以後

代々ノ王位輕クシテ、武家ノ為ニ威ヲ失セ給ヘル事、偏ニ二宝剣ノ君ノ御守ルゾ。——略——

ト成セ給ハデ海底ニ沈メル故也。剰ヘ今内侍所・璽ノ御箱サヘ外部ノ塵ニ埋レテ、登極天子空ク九五ノ位ニ臨マセ給ヘリ。依レ之四海弥乱テ一天未レ静。爰二百王鎮護ノ崇廟ノ神、

「わが国には神代から伝わる三種の神器がある。たとえ王位を継承するべき君が皇位を継いだとしても、この三つの宝がないときは、天皇も天皇ではなく、治める世も正常ではない。承久の乱以来、王位は軽視され、武家によってその威儀が失墜させられているのは、ひとえに宝剣が君の守りとな



伊勢神宮

いわゆる憑物によるご神託である。

ここでまず注目すべきは、三種の神器が伝えられていない天皇は天皇ではないという記述である。三種の神器を、皇位の標識として重視する風潮がいかに高まつていたかがわかる。そしてその中でも、草薙剣について特筆し、王位が軽視されていた当時の状況の理由を、この宝剣が紛失していることに求めている。当時、草薙剣に対する注目度が相当に高かつたことが窺われる。

説話の文脈に戻ると、続いて、円成は上京し、日野大納言資明卿を頼つて、宝剣を差し出した。資明は、とりあえず円成に銀造りの剣を二振と着物をあたえ、宝剣を春日神社の神殿に納めた。

三種の神器がない

天皇でない

草薙剣に対する注目度



夢 神と人が接触

Ex.平清盛の巖島におけるお告げ

Ex.神武東征伝説（初出か）

資明は、「日本書紀」に詳しい平野社の神主である神祇の大副兼員をよんで、三種の神器について説明させる。資明は兼員の説明を聞いたあと、今回の事件の経緯を話している。

続いて、兼員は次のように言う。

「但ただし今モ仏神ノ威光ヲ顯あらはシテ人ノ信心ヲもよほ催スハ、夢ニ過タル事ハナキニテ候。所詮先此剣ヲ預ケ給たまひテ、三七日ガ間幣帛はくヲ捧ささゲ礼奠ねいどんヲ調ととのへ、祈誓きせいヲ致シ候はんズル最中さいちゆう、先ハ両上皇、閔白殿あん下、院司いんしノ公卿くぎやう、若ハ將軍、左兵衛督ののかみナンドノ夢ニ、此剣誠ニ宝劍也ケリト、不審ヲ散ズル程むかうノ夢想ヲ被らわ御覽ごらんせ二候はハ、御奏聞候へカシ。」

「仏神の威光を示し、人に信仰心をおこさせるのは夢以外にはありません。まずこの剣をお預かりして、二十一日のあいだ祈りましよう。その最中に、両上皇、閔白殿下、院の御所に勤める公卿、將軍、左兵衛督などの夢に、この剣が眞実の宝剣であるといふような夢想をご覧になれば、天子に申

し上げてください」と。

この剣が本物の宝剣であるかどうかの真偽を、夢によつてはかろうというのである。日本には古くから神の意志が夢によつて

人に伝えられるという考え方がある。『平家物語』「大塔建立」の一節で、平清盛が夢の中で巖島の大明神のお告げを受けた話などは、その典型である。根本には

神々と人間が夢を介して接触するという思考がある。神武東征伝説で、武神タケミカヅチが夢を介して靈剣を下界にくだした話あたりが初めではないだろうか。「仏神の威光を示し、人に信仰心をおこさせるのは夢以外にはない」という考え方には、こういった思想の流れが下地にある。

この剣をあずかった兼員は、平野社の神殿に剣を安置して、十二人の僧に大般若經を読ませ、三十六人の神子に長時間の神楽を舞わせた。

二十一日目の満願の日に、鎌倉左兵衛督直義朝臣が不思議な夢をみた。五色の雲が立ちのぼる中あかかと輝いている太陽があり、その光の上に宝剣と思われる剣が立っている。それを梵天、四天王、龍神らが

とり囲んでいる、という夢である。伊勢大神宮から宝剣がもじされたために、執り行われた儀礼の様子を描写した夢であるといふ。

兼員は急いでこの夢のことを資明に報告した。これをうけて資明は天子に申し上げ、八月十八日の早朝に諸卿が参列し、宝剣を受け取つた。

ながく行方がわからなくなつていた宝剣が、めでたく返つてきました。

▼▼宝剣返還説話の大逆転

しかしこの話は、ここで終わらない。以下、「太平記」の中の草薙剣像が徐々にあらわれてくる。

当時の朝廷には勢力を二分する賢臣が二人いたという。一人は今回の宝剣返還に尽力した日野大納言資明であり、もう一人は坊城大納言経顯という人である。力量のある者が二人いれば争うのが世のならいであるが、この二人も例外ではなかつた。

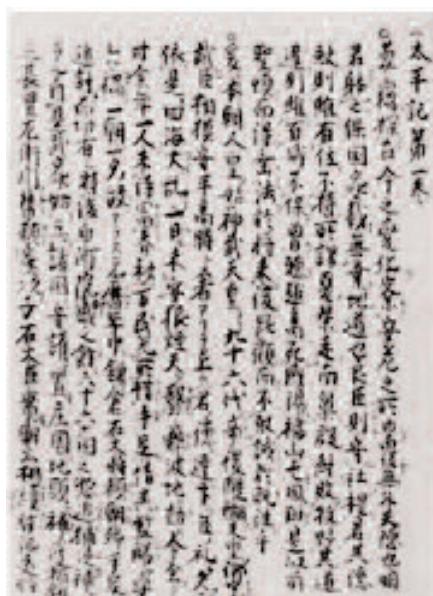
そして、以下のようないくつかの展開をみせる。



刀剣の歴史と思想

『太平記』が語る草薙剣像

太平記（国説日本文化史大系7）小学館、1968年より



爰ニ伊勢の國ヨリ宝剣進奏ノ事、日野大納言被執申一タリト聞ヘシカバ、坊城大納言經頭卿院参シテ被レ申ケルハ、
一中略一 侯臣仕レ朝國有ニ不義政一トハ是ニテ候也。先思テ見候ニ、
素盞烏尊古ヘ簾ノ河上ニテ切ラレシハ岐ノ蛇、元暦ノ比安徳天皇ト成テ、此宝剣ヲ執テ龍宮城ヘ帰リ給ヒヌ。其ヨリ後君十九代春秋百六十余年、政盛ニ徳豊ナリシ時ダニモ、遂ニ不二出現一宝剣ノ、何故ニ斯ル乱世無道ノ時ニ當テ出来リ候ベキ。

宝剣返還が資明の執りなしによるものであることを聞いた經頭は、院に参上して「侯臣が朝廷に仕えると国に不正な政が行わるというのはこのことです。まず考えてみると、スサノヲにその昔、簾（肥）の川上で斬られた八岐蛇が元暦のころ安徳天皇となつてこの宝剣をとつて龍宮城へかえつたものが、その後、政治が盛んで徳が豊かな時代であつてもついに出現しなかつたのに、なぜこのような乱世無道のときに出でくるものでしようか」と申し上げた。

壇ノ浦での宝剣紛失を、昔、スサノヲに斬り殺された大蛇が靈剣を惜しむあまり安

徳帝となつて取り返し海の底で神龍の宝としたという、『平家物語』にみる独自の中世神話を引用したものであろう。いざにせよ、問題にされている剣は偽物であるとの主張である。

經頭はさらにつづけて、

若又直義ガ夢ヲ以テ、可レ有ニ御信
用ニテ候ハゞ、世間ニ無ニ定相ニ事ヲバ夢幻ト申候ハズヤ。サレバ聖

人ニ無し夢トハ、是ヲ以テ申ニテ候。

「もし直義の夢をもつて信用されているのであれば、世の中に定まつた形のないことを夢幻と申すではありませんか。聖人に夢なしとはこのことをいふのです」と申し上げた。

中国思想における

夢の解釈

經頭の夢の解釈には、どうも中国思想の影響があるのでないかと感じる。実際に彼はこのあと中国の故事をもちいて夢のはかなさを説いている。「聖人に夢なし」とは、聖人は心が正しく雑念がないから安眠し夢などみることがない、という意味であるが、これを説明するのによくもちだされるのも、『莊子』の「古の真人は、その寝ぬるや夢みず」（古の真人は寝ても夢を見ぬることがない）との一句である⁽⁴⁾。こういった夢の解釈には、抽象的な思考を好み古代中国人の特徴がよくあらわれている。經頭は、日本に古くから伝わっている、神の意志が夢によって人に伝えられるという考え方をもとに宝剣の真偽を確かめようとした資明のやり方を、全く違つた夢の解釈から批判しているということである。

経顯は最後にこう言う、

「輪言再シ難トイヘ共、過則
勿レ憚レ改ト申事候ヘバ、速
ニ以前ノ勅裁ヲ被ニ召返一、南都ノ嘆訴
事未萌前ニ可レ被止ヤ候ラン。」

「天子のお言葉というものは撤回しにくいといわれるが、誤りとわかれば直ちに改めることに憚ることがありましょうか」と。

驚いたことに上皇はこの意見をあつさり聞きいれ、院宣を覆して宝剣を平野社の兼員にもどしてしまった。

では宝剣草薙とは何なのか！

刀剣の歴史と思想

『太平記』が語る草薙剣像

▼▼草薙剣像のひとり歩き

面白い話であるが、古代からの一連の流れを考えると腑に落ちない感はある。

では宝剣草薙とは何なのか、ということである。

『平家物語』にみた源平争乱ではあれほどまでに固執し、『太平記』にあっても、「三つの宝がないときは、天皇も天皇でない」

とまでいって重視し、「王位は軽視され、武家によつてその威儀が失墜させられてい

るのは、ひとえに宝剣が君の守りとならず海底に沈んでいるためである」として問題視してきた草薙剣。それが本物であるかどうか、その真偽を確かめようとした資明の態度は、これまでの経緯から考えて当然である。これを夢により確かめようとした方

法についても理解できる。しかし、あまりに不可解なのが最後の展開である。

朝廷内の特定の二人の仲が悪いということだけで、反対意見がまことしやかに展開され、驚くべきことにこの理屈によつて宝剣の真偽までが簡単に覆つてしまつ。ここに前時代とはちがう草薙剣像がある。

「人に信仰心をおこさせるのは夢以外にはない」という兼員の言葉が如実に語つてゐるよう、『太平記』において重要なのは、人びとに信仰心をおこさせることであり、その対象は何でもよかつたとも考えられる。宝剣の真偽は二の次であつた。さして

重要ではなかつた。それゆえ片方が納得いかないとなれば、夢の議論程度で簡単に覆つてしまい、曖昧にされてしまう。

(4) 「大宗師篇」

(3) 本連載第九回目において、既に紹介をしている。

もはや天皇の位を象徴する宝剣が本物であるか、それを実際に所有しているか、といったことが重視される段階ではなく、宝

剣の象徴性がひとり歩きをし、信仰心といふことばを使つたが、その象徴性が人々に認められれば社会のなかで機能していく。

『太平記』にいたつては、すでにそういう段階である。

実在のない象徴性とでもいおうか。

(註) (1) 「自伊勢一進ニ宝剣ニ事」(卷第二十
五)

(2) 平清盛は、巖島神社の修繕を終えてこれに参詣した際、夢の中で大明神の使

いから「汝この剣をもつて一天四海をしづめ、朝家の御まぼりたるべし」(汝はこの剣をもつて天下を鎮め、朝廷の御守りとなれ)といふお告げとともに、銀の蛭巻をした小長刀を賜つたことが記されている。(『平家物語』卷第三)

実在なき象徴性

